2　金属貨幣の発生① －布幣－

（側面からみた柄の部分）

空首布

平首布

（写真は70%に縮小）

布幣（布銭・布貨）

布幣は、柄の部分と平面部からなり、それぞれを人の首や胴体に見立て、それらの形態上の特徴によって分類される。柄の部分が空洞の「空首布」と同部分が平らな「平首布」に大別され、さらに平面部（胴体）の上部（肩）や下部（足）などの形態によって細分される。

殷・周の時代の中国では「たから貝」が貨幣として使用されたが、春秋戦国時代（紀元前8世紀～紀元前3世紀）になると、金属貨幣が登場し、広範に流通するようになる。

王侯貴族間の贈答品としても使用されていた青銅製の農具、小刀、各種器物などの実用器は、周の時代に金属自体の地金価値に着目した物品貨幣として使用されるようになり、さらに金属貨幣へと転化していったと考えられている。初期においては、銅の地金の重量を計って用いる秤量貨幣であったが、重量計測の手間を省き取引上の利便性を向上させるため、農具や小刀などを模して一定の形、重量に鋳造された貨幣となっていった。

こうした鋳造貨幣として最初に登場したのが布幣（布銭、布貨ともいう）で、古代の鋤（スキ）形の農具から発展、変化した青銅製の貨幣である。布幣の「布」という字の由来については諸説あるが、鋤形の古代農具を指す漢字「鎛」（ハク）が、同音で簡易な漢字「布」で代用されるようになったとする解釈が一般的である。

布幣は、西周末期から春秋時代にかけての時期に登場し、戦国時代には、鉄製農具の普及による農業生産力の向上を背景とする商工業の発展、貨幣経済の進展のなかで、中原諸国を中心とした現在の山西省、河南省、河北省、陝西省南部および山東省西部で広く流通した。初期の布幣「空首布」は、原型となった農具の形を忠実に模して作られ、柄の部分は棒状のものを取り付けられるような形状（空洞）になっている。その後、次第に薄く平らに変形し、小型・軽量化した「平首布」へと発展した。

布幣には、数字、干支、鋳造地名などの文字が記されているものが多く、そのなかには「半釿」、「一釿」、「二釿」といった貨幣単位を示す文字もみられる。「釿」は、布幣の重量を表す「斤」という重量単位が貨幣単位へ変化したものである。こうした貨幣単位が記された布幣は、「半釿」、「一釿」などの貨幣単位に応じ、大小一定の形状、重量に鋳造されている。度量衡がまだ統一されていなかったことや、時代とともに布幣が軽小化していくこともあり、「一釿」の重量は、地域などによって異なるが、出土した布幣によると概ね12～18gの範囲内であることが知られている。

［山岡直人、日本銀行金融研究所研究第3課］

【参考文献】
王毓銓、『我国古代貨幣的起源和発展』、中国社会科学出版社、1990年
奥平昌洪、『東亜銭志』、岩波書店、1938年
馬飛海・汪慶正編『中国歴代貨幣大系』≪先秦貨幣≫上巻、上海人民出版社版、1988年
三上香哉、『考古学講座 貨幣』、雄山閣、1929年
山田勝芳、『貨幣の中国古代史』、朝日新聞社、2000年